台北第三高等女学校物語

元台湾輔仁大学教授
台北第三高等女学校聯議誼会総幹事
黄彬彬
中京大学名誉教授　　北川薫

投稿の経緯：北川薫

2021 年、（一般社団法人）日本体育・スポーツ・健康学会の責任編集である「体育の科学」誌に、温故知新－台湾を偲んで－と題して 6 回連載させていただきました。前学長の安村先生にもご執筆いただきましたが、大きな反響を頂いたものと自負しております。その 11 月号、12 月号にて黄先生が台北第三高等女学校の歴史が正しく書かれていない、とのことをお書きになっています。研究者として由々しきものと思い、どこかにきちんとした歴史を残すべきと考え、社研アーカイブ「記憶のアーカイブ」への投稿をお勧め致しました。ご一読下ればお判りになるかと思いますが、生き証人である黄彬彬先生と台北第三高等女学校を通じて、台湾と日本との深い歴史がお判り頂けるものと確信しています。

黄先生が、今日の日本人が忘れている良い意味での日本人魂をお持ちであることが「体育の科学」の連載でよく分りました。今日の日本が諸外国から高く評価されているのは、京都に代表されるような異国情緒ばかりではなく、むしろ、日本人の持つ他者への思い遣り、優しさであろうと思います。私事ですが、2021 年 12 月末、高校時代の友人らと和歌山県の御坊市に酒飲み小旅行をしましたが、そこに住む JR 職員、私鉄の運転士、床屋さん、お好み焼き屋さん、といった方々の見ず知らずの怪しすぎる異邦人？3 人組への気遣い、思い遣り、優しさに感激して帰って参りました。現在のビジネスという名の資本主義（拝金主義？）の世界で、これこそが、日本人が評価される日本の原風景と強く感じ入りました。

僭越ではありますが、以下に、本稿をより深く御理解頂くために、黄彬彬先生から頂いた履歴を記述させて頂きます。

1933 年（昭和 8 年）台湾、台北県に生まれる。
　父は公学校校長、母は公学校教務主任
1939 年 4 月 1 日公立台北南門小学校入学
1945 年 3 月公立台北南門小学校卒業、4 月 1 日台北州立台北第三高等女学校入学。1945 年 8 月 15 日終戦
1945 年 9 月台湾省立台北第二女子中学初級中学（元 台北第三高女）編入
1948 年 9 月台湾省立台北第二女子中学高級中学（略称 北二女）入学

1951 年 7 月台湾省立台北第二女子中学高級中学卒業
同年 9 月国立師範大学入学
1955 年 7 月国立師範大学卒業
1955 年 8 月～1966 年 7 月台湾省立台北第二女子高級中学、教師
1966 年 8 月～1988 年 7 月台湾輔仁大学、講師、副教授、教授
1988 年 8 月―2019 年 7 月台湾輔仁大学兼任教授
（1976 年公費派遣：日本筑波大学運動医学研究室研修
この間、東京大学、順天堂大学、慈恵医科大学訪問研修）
中京大学関連事業
1999 年　日本健康科学会第 15 回大会招待講演
2016 年　中京大学大学院体育学研究科特別講演
2017 年　国立台湾大学 ENBA 合唱団公演引率
1988 年～2009 年台湾輔仁大学兼任教授
2003 年～2019 年台北第三高女校友聯誼会総幹事
〈其他特記事項〉
北二女バスケットボールチーム（写真 1）
蒋介石総統接見良友隊（写真 2）

写真１筆者は後列左 1、2 が呉宝華　　写真２筆者は後から 2 列、右 1

第一部～歴史は語る：温故知新　第三高女の真実～
前言：黄彬彬

此度は、格別のお計らいをもって、社研アーカイブ「個人の記憶のアーカイブ」に拙文を掲載させて頂き誠に光栄に存じます。また、社研アーカイブ「個人の記憶のアーカイブ」をご紹介して下さいました北川薫先生に厚く御礼申し上げます。

台北第三高等女学校（以下、三高女）は戦前台湾で最初に創立された女子学校で、2022 年で 125 年の歴史になります。1922 年に日台共学が発布されるまでは就学学生は台湾人だけでした。故に全台湾のエリート女性の憧れの的でした。

しかし、最近の研究報告にて、母校が正しく紹介されていないことが分か

りました。その理由として、資料収集が聞き取り口述であった事ではないか、と思います。歴史認識に於いては語弊や錯誤があったり、文書では消失したりする恐れが生ずることから由緒ある母校の正しい史料を、文字で残す事を三高女聯誼会一貫の理念とし、三高女聯誼会編集による会誌（所謂、公式記録）を沢山残してきました。

2013 年（平成 25 年）3 月、筆者がふとしたきっかけで読んだ台湾オーラルヒストリー研究会編集の「台湾口述歴史研究第 8 集」の内容に誤謬があるのに気が付きました。由緒ある母校の歴史以外に、戦前の台湾事情描写にも語弊があります。口述歴史研究ですから話し手の語弊や記憶錯覚から生じた所以かと思います。それらの誤謬を指摘し正しい歴史を残すのが本意です。その所存で本稿では訂正、立証、説明記述の後に、話し手のＬ女と聞き手のＳ教授の誤謬会話を赤字で掲載することに致しました。

なお、全般的に読者に了解して頂きたく、本稿と相関ある戦前の社会事情概要を入れました。

Ⅰ戦前の社会事情

1 祖国、母国、母国語

終戦後、76 年が経ちましたが、まだ台湾では日本語での会話が絶えません。台湾で育って終戦後日本へ引き揚げた人達は、祖国は日本ですが、台湾は私達の母国です、故郷です、と言います。同じく日本教育を受けた年層の台湾人もよく私達の母国語は日本語だと言います。三つ子の魂百までも、と言いますが、日本時代の教育がしっかり根に付いているもの、と思われます。

1986 年（昭和 61 年）に、主人が奉職する台北一と謳われる私立名門校である延平中学を日本の教育訪問団が訪問した折の事です。そこの先生方が殆ど流暢な日本語で話し合ってるのにびっくりしました、とのことです。その学校の先生方は日本時代の教育を受けた年層の台湾人が多く、授業では勿論国語（中国語）を使いますが、会話は自然と日本語になるのです。

実例を以下に述べましょう。10 年程前の事です。民間で中高年者を集めて組織した合唱団に参加していた私のクラスメートＴさんの事です。ある日、日本語の歌を練習している時に、先生が日本語を使って説明しました。その先生の日本語に間違いがあったので、Ｔさんは良かれと思ってその間違いを指摘しました。しかし、日本留学の先生はＴさんの指摘に不服で、『私は日本に四年間留学したのです。間違えることはありません』とおっしゃいました。Ｔさんも負けずに『私にとって日本語は母国語ですよ、何十年も使った言葉です』と、遣り返しました。激怒した先生がＴさんの会費を返しＴさんを追い出しました。このように、台湾の年長者では、普段の会話は日本語ばかりでなく、会誌に載せる原稿も日本語の方が多いほどです。

もう一つは、昔、インドネシアの旅行で出逢った当地の男性が私達夫婦を日本人と思い話し掛けて来たことです。上手に日本語を話すので、何処で習ったかと聞いたら戦時中に習ったそうです。主人（旧制台北高校、終戦後改名国立師範大学出身）と日本語で随分お喋りした後、二人で『愛国行進曲』を声高らかに合唱しました。その人はとても嬉しかったらしく、楽しく道案内をしてくれました。南洋でも日本語教育に力を入れていたようですね。

余談ですが、現今の台湾に於いて大学生の選修外国語は英語が一番多く、次が日本語の様に見受けられます。

さて、祖国は？台湾人の祖先は大抵中国福建省から来ました。だから台湾人の祖先は中国人に間違いありません。私の祖先も福建省からの移民で、私は第８代になります。しかしなぜ、祖国は？と？マークを付けるのでしょうか。以下の記述でお分かり頂けると思います。

1945 年 8 月 15 日から台湾が日本の殖民地から祖国に戻った歓喜は束の間だけでした。9 月に学校へ戻って勉強を開始した学生達は時々、国軍（蒋介石政府の軍隊）の歓迎に駆り出されます。何時間も道路に立たされた挙げ句、空振りが何日か続き、やっと出迎えた国軍は唐傘背中に、天秤棒で鍋釜かついだヨレヨレの汚い軍服姿のダラダラ軍隊でした。紀律厳しく足並みを揃え隊伍整えて颯爽と行進する日本軍隊とは雲泥の差です。歓声どころか皆唖然として呆れて目を見張るだけでした。生き証人である私達の鮮明且つ忌わしい共同話題の思い出です。歴史の転回に悲劇は付き物ですが、失望と同時に、所謂、祖国？がもたらした台湾人の悪夢が、そこから始まりました。

国軍進入後、国軍軍人によって台湾の治安は悪化し、人々は不安と恐怖に慄き軍人が身勝手に乱入強奪する故、以前は開けっ放しでよかった門を固く閉めなければならなくなりました。中国政府の接収後、台湾の治安は更に悪化し、無数のエリートの犠牲者が続出し、日本時代の台北市競馬場は銃殺刑に処せられた無辜無罪の人達が無念の思いで天国へ旅立つ場所になりました。汽車通学生だった私は時々物々しい憲兵護送の、死刑場に送る人達を載せた大型軍用トラックを車窓から見かけました。暫くすると銃声が聞こえ、車内は急に静寂になります、乗客達は皆心を痛めた事と思います。あるときは後手に縛られて銃殺された遺体を競馬場に残したままの場面も見ました。何の囲いもない広場で見世物の様な銃殺の執行ばかりでなく、遺体もそのまま放置して家族に引き取らせるような酷い仕打ちは、私の知る限りでは台湾では前代未聞でした。

戦前の台湾を、台湾人は大抵日本慕情を秘めた日本時代、或いは日治時代（日本統治時代の中国語）と言いますが、外来者（外省人の事）は日拠時代（日本占領時代の中国語）を使いたがります。８年にわたる対日交戦は困窮の台湾人同胞を救うための戦争だから・・・、中国政府は台湾人の恩人だか

ら・・・、聞いて呆れることを臆面なく台湾人に押し付ける国民党政府は台湾を占領する意識で台湾へ亡命したようでした。この「だから弁」を唱える連衆の多くは電灯も水道水も知らない人達でした。生活水準がずっと優れた台湾に、占領意識で君臨した国民党政府が行った台湾人に対する処置は、法も制度もない独裁政権でした。ある観光ガイドの話によれば、昔、台湾各地に有る蒋介石の別荘には、侵入者斬り捨て御免の高札があったそうです。このように筆舌に尽くし難い残虐、恐怖政治は多くのエリート台湾人の犠牲者をもたらしました。

今日の自由民主は先駆者達が多大な犠牲を払って、長年奮闘して勝ち得たものです。改竄された歴史を習った今の若い世代には、白色恐怖時代（理由なしに、エリートを逮捕、虐殺、島流しをした蒋介石独裁時代）を知らない人が多い様です。因みに白色恐怖時代の国軍とは国民党軍で、国家の軍隊ではありません。「党庫通国庫，党国・・・」（国民党の金庫は国の金庫と通じている。国は党の所有という意味）と言われた如く、全てが党有りてこそ国あり、なのです。自由民主時代になり、国軍とは国の軍隊と認識出来る様になりました。蒋介石の息子である蒋経国の最高の功績は、李登輝を大統領に抜擢したことです。

昔、台湾で育った日本人が台湾を母国と見做し、日本語を母国語とする台湾人と日本人の間には未だに深い絆で結ばれた誼があります。筆者は 4 月 1 日に三高女入学で 8 月 15 日終戦ですから、実質上三高女の教育は受けていません。しかし、奇妙な縁で三高女聯誼会総幹事役を託され、三高女に対する認識が深まるにつれて、三高女の師弟間、朋友間の深い誼を切実に感じ、大先輩から託された文字で母校の正しい歴史を後世に残す事に努力して参りました。本稿を通じて日本と台湾の深い関係をお分かり頂ければ望外の喜びです。

2 公学校．小学校

1895 年下関条約で清朝王国が、台湾を日本に割譲しました。日本政府は台湾人の勉学のため、台湾総督府国語伝習所を各地に設置しました。1896 年更に日本人就学の小学校と台湾人就学の公学校を各地に設置し、1905 年には原住民就学の公学校も設置しました。小学校も公学校も 1941 年に一律国民学校と改名されました。

師範学校は日本人就学の甲科と、台湾人就学の乙科と二科に分けて、甲科は更に第一組と第二組に分けていました。第一組は小学校教師育成、甲科第二組は公学校教師育成の目的で台湾語の課程があります。乙科は台湾人学生を公学校教師に育成する目的で日本語課程の時間数を甲科より多くしています。斯様な師範教育制度ですから、師範学校卒業後日本人は小学校教師にも公学校教師にもなれますが、乙科卒業生の台湾人は公学校教師にしか成れません。師範学校の教育制度に於ける教師育成目的にハッキリした日台差別が

ある事がお分かり頂けると思います。

以下は前述した台湾口述歴史研究第 8 集の記載ですが、間違いです。

S 教授；三高女卒業の台湾人は小学校の先生になる人もいたんでしょうか。

L 女；そうですね。小学校のほうもありました。

早期の師範学校収容学生は男性だけでした。女性教師は 1919 年から三高女に設置した三高女卒業後、一年修業の師範科で育成していました。三高女師範科を卒業生すれば公学校教師免許状が取得できます。師範学校受験資格は小学校卒業、修業年制は 4 年です。三高女では手芸、刺繍、織物、裁縫、家事等の公学校教師に適切な教科を修業していますので、公学校教師には適切とみられ、三高女卒業後公学校教師になった人は少なくありません。

三高女師範科は、1922 年に講習科、1928 年に補習科、と改名し、1940 年に第二師範学校に女子講科が設置された年に廃止しました。

台北師範学校はその後日本人が就学、小学校教師育成の第一師範学校学校と、台湾人就学、公学校教師育成の第二師範学校に変貌、第二師範学校は終戦後台北女子師範学校になりました。

3 日台共学

1919 年発布された台湾教育令は日本政府が台湾に於いて発布した初の台湾教育基本法です。しかし三年間実施されただけで廃止されました。1922 年、新たに台湾教育令が発布され、日台の差別待遇を取り消し、普及教育を実施すると共に日台共学（日本人と台湾人共学）に改められました。

しかし台湾人が小学校に入るには厳格な入学試験があります。合格率は大変低く、一クラスに 2、3 人だけで、台湾人編入がないクラスもあります。

三高女は元々台湾人就学の学校でしたが、1922 年から日台共学を初め、第一年目に入学した日本人は 9 人だけでした。その後日本人受験生が益々増えるので、当初収容人数は一学年三クラスなのを一クラス増設して一学年四クラス収容に改めました。

因みに本校が台北州立台北第三高等女学校に昇格した 1922 年在学中の最高学年を三高女第一期生として、翌年から入学年を基準に期生の称号で学年区別が分かる様にしました。1945 年 4 月入学の 26 期生が最後です。

Ⅱ人生分け目の三高女入学

1 南門小学校から三高女へ

私の父は台北第二師範学校卒、母は三高女師範科卒ですから二人とも公学校教師でした。しかし学齢期の子供は皆台北市南門小学校に入学させました。南門小学校は 1905 年第三小学校として創立、1914 年に城南小学校と改名、1922 年に南門尋常小学校と改名しました。キャンバスはとても広く、男学生用の雨天体操場と女学生用の雨天体操場、プールは 25m の大プール以外に初心者向きの小プールがあります。当時台北市には 29 校の小学校がありま

したが、南門小学校は最大の小学校でした。卒業生達が一番思い出深いのはプールです。日台共学が開放された1922年から台湾人も入学試験に合格すれば就学出来る様になりました。しかし合格率はとても低く一クラスに2-3名ぐらいだけです。台湾人配置がないクラスもあります。開校第一回の卒業生は35人だけでしたが、私が在学中の在学生は2400名もありました。将来の発展に備えて創立当初から広い敷地を取っていたので広々として設備、景観も素敵な学校です。終戦後一時警察官学校に成りましたが現在は台北市立南門初級中学校です。

小学校卒業生はよく日本人に虐められたかと聞かれますが、南門小学校ではそんな事はありませんでした。日本人が軽蔑の意味で台湾人の事をよくリーヤ（リは李姓）と言いますが、南門小学校では使われません。森永校長先生は、台湾人を差別待遇や虐めたりしてはいけないと、よく朝礼の訓示で話していたのを今でも憶えています。

一般的に厳格な試験を経て入学した台湾人の成績は日本人より良かった様です。しかし成績の面で差別待遇はやはりありました。台湾人には全甲をくれません。私の筆記試験は大抵100点です。高女の受験準備で先生は放課後一時間ぐらい学生を残して算術の補習をします。最後には必ず試験をして、完全に解答できた人は帰宅できます。私はいつも一番先に教室を離れました。戦争になって慰問袋に入れる図画も書かせられた事もあり、書き初めも貼り出されました。しかし成績表には必ず図画か音楽かが乙です。だから台湾人は絶対に一番にはなれません。

父母が景尾公学校教師だったので、家族は学校の宿舎に住んでいました。南門小学校に通うには新店ポッポと名付けられた時速20kmぐらいの汽車に50分ぐらい揺られて下車後学校まで20分ぐらい歩かねばなりません。

1944年から空襲が頻繁になり、当局が景尾から徒歩で一時間ぐらい掛かる木柵に深坑小学校を建て、郊外から台北市の小学校へ通っている学生を疎開させました。私が強制疎開させられたのは6年生下学期です。

深坑小学校は広い空き地の中にポツンと建てられた校舎です。授業の傍ら鍬で空き地を掘って春菊や芋やヒマなどを植えることも習いました。間もなく校舎は軍に徴用され、学校は付近の廟に移りました。

疎開して来た6年生は男子が3名、女子は日本人の金山さんと、台湾人の私とMさんの3人です。卒業式は廟で先生方と写真を撮っただけです。

空襲が激しいので疎開生の中学への進学は入学試験がなく、先生が成績によって推薦する学校へ内申書を提出する事に成りました。当時台北市には一高女（1904年創立）、二高女（1919年創立）、三高女（1897年創立）と三校ありました。先生は金山さんと私を一高女へ、Mさんを三高女へ内申する予定でしたが、母は三高女を堅持しました。実は優秀な成績で南門小学校を卒業した姉が先生に勸められ、一高女を受けて優秀な成績で合格しましたが、

口頭試問で母が三高女卒と分り、それが理由で落とされました。余儀なく姉は翌年三高女を受け直し、一年遅れて入学した苦い経験があったのです。母の反対で私は母と姉の母校三高女に 26 期生として入学しました。若しその時先生の推薦に従って一高女に進学したら私は別の人生を辿ったことでしょう。

さて、L 女が第一回の三高女受験で落された事の二人の口述は下記の如くです。

S 教授；受けた時は学科ができなかったですか、それとも他のものができなかったと思いますか。

L 女；わかりません、今でもわかりません。

S 教授；実際に試験を受けた時に、できなかったと自分で思いましたか。

L 女；それもわからないです。筆記試験が通っても口頭試問で落ちることがあるんです。どう言うことで落ちたかわかりません。でも私はずっと成績は良かったんですよ。

大事な入学試験です。筆記試験合格、不合格の通知は必ずあるものです。三高女が落す理由なくして落すことはありません。

2 雲母剥ぎ、勤労奉仕、玉音放送

小学校卒業の時、一高女への進学勧誘でクラス主任の林先生が何度も家庭訪問をしましたが、姉の前例でもう懲り懲りの母は反対を押し通し、そのお陰で私は台湾人の誉れ高き母の母校の台北第三高女に入学しました。時は敗戦の色濃くなりつつある 1945 年 4 月です。当時は空襲が頻繁になり都会の数多くの人が疎開していた矢先なので学校での授業も止められていました。三高女は校舎を軍に徴用されたので二高女の校舎を借用して、暫くは午前中は二高女が授業、午後は三高女が授業と、半日授業をしていましたが、私が入学の折には授業は取り止めて事務職員だけが出勤していました。学生達は居留区別の区隊で昼間は勤労奉仕、夜は家で雲母剥ぎの毎日でした。雲母は飛行機の何かに使うらしく全学生に託された作業ですが、勤労奉仕作業は所によって異なり仕事は同じでは有りません。山の開墾、稲刈りの手伝い、畑仕事など色々ありました。こうした社会情勢下での職業についてＬ女は以下のように語っています。

注記：L 女が秘書を強調する会話は一部分割愛しました。

L 女；蘇州領事館領事の秘書になったんですよ

S 教授；領事館で主になさっていた仕事はなんですか

L 女；秘書ですから色々書かせられました

S 教授；給料は幾ら貰いましたか

L 女；貰っていません。奉仕するつもりで。

S 教授；奉仕だとするとあの制度を何と言いましたか

L 女；勤労奉仕。

領事館の領事秘書は重要な職務です。領事が台湾人の小娘をひと目見ただけで、秘書にする事は有り得ないと誰でも思う事でしょう。S 教授も不審に思われたから問いただした様です。本物の秘書の事には触れていませんが、多分勤労奉仕で秘書の使い走りの仕事を手伝ったのだと思います。本稿に於いての指摘を読者の皆様御了承頂けると思います。

4 月 1 日入学手続きを終えた私は文山景尾区隊に編入され、雲母と雲母剥ぎ用のヘラを貰って、翌日から被服修繕部隊で勤労奉仕作業を始めました。

どこかに破損のある軍服をミシンで繕うのが私達の仕事です。それぞれ下糸も針にも糸が通っているミシンの前に腰を下ろして奉仕作業の第一日が始まりました。初めてミシンを使う私は、他の方々を見習い、どうにか破れを繕う事ができて、一人で喜んでる矢先に糸が切れました。下糸は引っ込んでしまい、いくら方法を講じても下から上に下糸を通せません。先輩達は一生懸命に仕事をして居るので誰も私が下糸をどうやって通うそうかとミシンの下を覗いて思案にくれていることも知らず、軍の方に聞くのも何か恥ずかしくて声をかけられず、大汗小汗をかきながら椅子に座り溜息をついた途端、思わずミシンを踏んでしまいました。輪が回って針が中に入り又出て来ました。これは大変と慌ててミシンを止めて見ましたら、何と針に付いてる糸が下糸を引っ張り上げているではありませんか。無意識的に下糸のかけ方を発見した訳です。

週に一度帰校して、剥いだ雲母を提出し、次回の雲母を貰って帰ります。帰校日には朝 5 時に区隊長の家で集合して東雲を頼りに二高女まで 10km ぐらいある道を歩いて行き、新雲母を貰って B29 や P38 が来る前に又歩いて帰ります。被服修繕は軍の方が乾パンやぜんざいを分けてくれたりしますので楽しい奉仕作業でした。

８月 15 日、日頃と同じく作業中に織田伍長が全員に大事な放送があるから身なりを整え 12 時前に広間に集合と伝えました。広間にはラジオが添えつけられ軍の方達が緊張した表情をして直立不動で待っていました。12 時に玉音放送があると知らされ私達も緊張してきちんと並んで直立不動で待ちました。

12 時きっかりに初めて聞く天皇陛下の声が流れて来ました。何か戦争に関する事みたいではっきりしません。織田伍長に『戦争は終わった。作業を止めて帰宅しなさい』と言われて、始めて日本が敗戦した事が分りました。戦争が終われば空襲が無くなるのは嬉しいが今後どうなるか分からないので、皆、複雑な気持ちで涙ぐんでいました。

Ⅲ州立台北第三高等女学校秘話

1 復学

1945 年 9 月に初めて三高女の校門を潜りました。校舎に弾丸の跡が有りましたが大きな破壊はなく、撤去した日本の軍隊が綺麗に元通りにして返した校舎の講堂での開学式では松、竹、梅、菊、桜、五クラスの新入生の指定座席が一番前に並べてあり、座席表に基づき各自の席に着きました。初めての顔合わせですから誰も知りません。

藤谷校長先生が座席表を持って、順番に一人一人御自ら点呼をなさいました。私の隣の人が答えた次が私なので緊張して待っていましたが呼ばれたのは知らない名前です。校長先生がもう一度呼びましたが返事する人が有りません。私が不思議な顔で校長先生の顔を見つめているので、もう一度名前を見直して『こうひんひんさん』と呼ばれましたので、勢いよく手を上げてハイ！と答えました。校長先生は黄彬彬を黄杉杉と見間違えて『こうさんさんさん』と読んだのです。

私の名前の彬彬は文質彬彬（北川注：出典は論語「子曰、質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子。」による。）の彬と言えば台湾では殆どの人は分かります。しかし、若い日本人には読めないばかりでなく、見たことないと言われる方もあります。しかし『薩摩藩主島津斉彬の彬ですよ』と言えばわかります。日本人では普段あまり見かけない字らしいですね。フィリピンの有名な男子バスケットボール選手で蔡彬彬と言う名前の人が私になぜ男の名前をつけたかと聞いたことがあります。他の人にも男と間違えられたことがあります。漢学者の父が何かを期待して名付けた名前かもしれません。

2 未遂のストライキ　～一、二の争い～

終戦で日本人が引き揚げた後、一高女も二高女も日本人が引き揚げたので、残った僅かな台湾人だけでは成り立ちません。二高女の台湾人を一高女に合併させてもまだ足りません。それで一高女は私学から一高女編入の申し込み者を集めたガラクタ学校に成りました。

当時の中国の学制では三年制初級中学と三年制高級中学がありました。初級中学も高級中学もあるのを完全中学として中学校と言います。二高女は無くなったので一高女を台湾省立台北第一女子中学（北一女、又は一女中)、三高女を台湾省立台北第二女子中学（北二女、又は二女中）にする事になるとの話で、三高女は最初にできた歴史が一番古い女学校ですから北一女になるべきだと学生や卒業生達が台中にある台湾省教育庁へ掛け合いに行きました。しかし取り合ってくれないので、学生自治会会長の一言で全校の学生が講堂に集まって授業のストライキをしました。鄭校長先生が教室へ戻れと命令しても誰も聞きません。暫くして三高女卒業生の Y 先生が来られて、『日本人の先生から人に迷惑がかかることはしていけない、と教えられましたよ。先生の教えを守って授業に戻りなさい』と諭したら皆おとなしく教室へ戻りました。私達一年坊主は上級生に従うのみでしたが、Y 先生の言葉でストライキが簡単に収まったのには鄭校長先生も思いがけなかったことでしょう。

1945 年 9 月から三高女は北二女になりましたが、1967 年台北市が直轄市に昇格し、北二女の初級中学が廃止されて高級中学に改制される折に、三代目の石校長先生の名案で、現在は中山女子高級中学（中山女高）として、北一女と対等な高級中学校となりました。中山女高は、三高女の偉業を受け継いで蔡英文総統等の多くの傑出人材を養成した誉れ高き周知の名校です。

戦前日本人就学の第一中学校は戦後、建国高級中学校に、台湾人就学の第二中学校は成功高級中学校と改名しました。石校長先生が孫中山の中山を校名にしたのは、『建国成功（中華民国）は中山の功労である』の意味で、中山女子高級中学校は建国中学校や成功中学校に勝る思考を含意した名案の成果です。この成り行きにもＬ女の語弊があります。

Ｌ女：光復当初先輩達が市政府まで乗り込んで、歴史から言えば三高女が一番古いから一高女に戻してくれと掛け合った…。

Ｌ女：---------私達が一生懸命また掛け合って来るでしょう、市長さんがもう一、二、三はやめて名前にしようと。だから中山女高ができたの

注記：上述の未遂のストライキで述べました如く、当初の高級中学は台湾省教育庁の管轄で台北市政府とは無関係です。

一、二の争いは終戦当時の 1945 年の事で、中山女高に改名したのは 1967 年の話です。時空倒錯甚だしい錯誤です。因みに三高女の創立は 1897 年ですが数回の改革を経て、４年制の州立台北第三高女に昇格したのは 1922 年です。その時すでに一高女（1904 年創立）と二高女（1919 年創立）がありましたので順位で三高女になったのです。差別待遇で三にした訳ではありません。

3 北二女は台湾女子バスケットボール覇王

私が高一の年（1948 年）に北二女がバスケットボールのチームを作りました。当時の台湾では球技としてバスケットボールはあまり見かけないものでした。1947 年に上海の新聞記者が台湾の運動状況取材の折に、台湾で一番遅れている競技運動としてバスケットボールとサッカーを報道しています。

選抜で北二女バスケットボールチームに選ばれた選手は殆どが 26 期生でした。北二女は 1948 年臺北市代表チーム選抜試合に参加したのが初試合です。この初試合で全勝し、台北市を代表して台湾省運動会に参加して以来、連続三年して台湾省運動会で金メダル獲得しました。銀メダル獲得は台北県代表の純徳女中です。北二女と純徳女中が試合の時には観衆が溢れる程でした。初期の女子バスケットボール中華民国代表チーム（良友隊）の選手は北二女と純徳女中から選出されたほどです。其頃アジアにおいては、日本も韓国も良友隊とは立ち打ちできない程でした。私は北二女時代から命中率が高いのでマスコミに神射手と名付けられました。私もクラスメートの呉宝華も良友隊の主将でした。呉宝華はバスケットボールの主将のみならず、陸上競技場でも有名な選手です。北二女は台湾省のバスケットボール競技の発展に大き

な貢献をなしたと言えます。

私は、毎年台湾省運動会に参加していましたので、以下の疑問だらけのＬ女の回答を訂正させていただきます。Ｌ女によれば、

Ｓ教授；公学校の運動会ではどんなことをやりましたか

Ｌ女：公学校時代に運動会で 100m、400m、1000ｍ、いつもパーンと走り出したら一番ですよ。1000m になったらね、一番と二番はもう半分ぐらい違います、とのことです。しかし、

1948 年 5 月 5 日から 16 日まで上海市での第七回中華民国全国運動会に参加した台湾代表は陸上競技で好成績を取りました。この大会では女子の短距離走は 60m と 100m だけです。張甘妹(現在は台湾大学法律学科名誉教授)が 8 秒 4 で 60m の台湾省記録を破り、13 秒 6 で 100m の台湾省の記録を破りました。1948 年 10 月台湾省運動会で張甘妹が 8 秒 1，呉宝華が 8 秒 2 で 60m の台湾省記録を破りました。其頃、全国運動会及び台湾省運動会に於いて、女子のトラック競技は 60m と 100m だけです。また、1948 年から 1951 年北二女と純徳女中が競い合っていた頃の女子バスケットボールルールは女子ルールで、前衛の活動範囲が前半場、後衛の活動範囲が後半場に分けられていました。1951 年初めて男子ルールで試合する女子華僑チームの訪台によって私達は男子ルールの応急訓練をして立ち会いました。台湾が女子も男子ルール使用との国際潮流に従って女子バスケットボールルールを男子ルールに切り替える時には、女性にとって男子ルールは激烈過ぎると、反対の声が多かったのです。だから公学校の競技で学生に 1000m 走らせる事はありません。

Ｌ女は 1923 年出生の方です。Ｌ女の公学校の運動会競技に、1948 年の全国運動会にも台湾省運動会にもない 400m,1000m 競技がある事はありえません。しかも 1000m 競技で二番との差が半分ぐらいもあるとは！夢想だったのでしょうか。

4　三高女歴史の変遷

1)校名沿革

1897 年台湾総督府国語学校第一付属学校女子分教場として、士林の民家の一部を借りて設置されましたが、数回の変遷を経た後、台北州立台北第三高等女学校が創立されました。当時は男尊女卑の時代で、女子に学問必要なし、とみなされていた時代です。又 1896 年 1 月 1 日に士林の芝山巌学務部学堂（芝山巌学堂）の 6 人の国語教師が土匪に殺害された（6 氏先生事件）事件があったので学生の募集は、並大抵ではありませんでした。

学校の上野先生が先ず入学示範役として、名望家の娘―洪氏愛珠さんを説得して入学させ、愛珠さんも協力して学生を 14 人集めました。学費は無料で遅刻、無断欠席、家事持参して教室で仕事しても先生は咎めません。毛糸の織物、刺繍、裁縫等の授業で学生達の興味をひき、国語、修身などの授業には通訳者が通訳する等色々気を配りました。特に喜ばれたのは、刺繍授業に

は先生が針、ハサミ、糸を揃えます。学生達は何も準備の必要がありません。出来上がった品物は先生が売って、その代金は全部学生にあげます。特に上出来な物は余計にお金が貰えますから、学生達も真面目に勉強に励みました。しかし学問は役に立たないと言われて退学した人もあります。明治 33 年手芸科の第一回生在学生は 14 人でしたが卒業生は 11 人でした。

三高女の歴史を纏めると以下のようになります。

1898 年台湾総督府国語学校第一付属学校
1902 年台湾総督府国語学校第二付属学校
1908 年万華公学校の教室借用。祖師廟に学寮設置。
1910 年台湾総督府国語学校付属女学校
1912 年西門町の新築木造校舎に移転。
1919 年台湾公立女子高等普通学校
三年制の本校卒業後一年修業の師範科設置。公学校教師育成。
1922 年台北州立台北第三高等女学校
1922 年台湾総督府教育令発布、日台人の差別待遇及び隔離教育廃止。
普及教育実施政策で日台共学開放。師範科を講習科に改名。
三年制から四年制高等女学校昇格。（北一女、北二女と同格になる）
*1923 年皇太子殿下が台湾巡視行幸の折、台湾女子教育状態御覧学校に指定される。
講習科を補修科に改名。高女卒業後一年修業。公学校教師育成。
1937 年 7 月 7 日中崙上埤頭新築新校舎へ移転
*1945 年 8 月 15 日終戦
1945 年台湾省立台北第二女子中学校
1967 年台北市立中山女子高級中学

2)　戦前歴代校長先生

町田沢文先生（国語学校時代の校長先生）
田中敬一先生（国語学校時代の校長先生）
本荘太一郎先生（国語学校時代の校長先生）
隈本繁吉先生（国語学校時代の校長先生）
田川辰一先生（女高普校時代の校長先生）
小野正雄先生（三高女学校時代の校長先生）
藤谷芳太郎校先生（三高女学校時代の校長先生）

3)　赤尾寅吉先生作詞、作曲の校歌

取材に来られた方々が必ず歌ってくれと要望するのが校歌。他に学生達が好んで歌う歌を披露させていただきます。歌詞から三高女史料が窺えられます。音楽の赤尾先生の作曲は沢山あります。その中の一部です

〈台北第三高女校歌　（1938 年 10 月）〉

一　大日本は神の知らす国　御民我ら幸あり栄えあり

潮路遠き南の島辺も　御代の光隈なく渡れば
明く浄き正道さやかに　教草の花こそ匂えれ
二　大日本は国ぞ栄ゆるや　厳し国をたたえよ乙女ら
君に忠に家の名けがさず　朝にむかふ真澄の鏡の
曇りなきを心と念ぜよ　智慧の真珠光を磨きて
三　大日本は道ぞ聖なるや　塵もすえじみさをは白菊
やまと心桜にならふと　世世のおしへ努めよわが友
その名千代にかくてぞあり経む　誉れ高きわれらの学舎

〈創立記念日の歌〉

注：台湾口述歴史研究第８集ではこの歌を校歌にしていますが間違いです

一　八芝蘭*の里に萌出し　　*八芝蘭はパチナ（地名）と読む
我が高砂の教え　繁りまさりて咲き匂う
友垣いまや数万人　祝えや祝えや今日の日を
二　根ざしも固き学び舎に
宮のいでまし五つ度　迎えし誉れいや高く
星霜ここに百余年　祝えや祝えや今日の日を
三　尊きご御稜威仰ぎつつ
歴史も古き学舎の　誉をいよよ輝かし
大御恵に答えなん　祝えや祝えや今日の日を

〈摂政宮台湾行幸奉祝歌〉

一　新緑薫る春４月　　九重高き雲居より
八重の潮路をはるばると　日嗣の御子のこの島に
出でまし給ふかしこさよ　万歳万歳万々歳
二　仰げば高き御光に　　千草の花も百鳥も
舞いつ歌いつとりどりに　日嗣の御子の御栄を
寿ぎまつる心地して　　万歳万歳万々歳
三　島の歴史にためしなき　　栄えある今日の嬉しさを
三百余万の島人は　　心に銘じて語りつぎ
言いつぎゆかむ万代に　　万歳万歳万々歳

Ⅳ三高女大躍進

１新校舎新築

1922 年に四年制度の高等女子学校に昇格した三高女の校舎は台湾に於ける唯一の木造２階建ての校舎です。その校地総坪数の少ないことに於いても台湾一です。学生数は北一女の次ですが校地は北一女の 1/3、北二女の 1/2 ぐらいしかありません。学生数は増えても設備は増設できず、運動場も狭くてトラックが取れぬため、明治節の運動会では＜走らない運動会＞と言う珍無類の運動会しか開催できませんでした。1912 年に落成した木造建ての西門町校舎は厳重な白蟻被害で改築せざるを得ない状態でしたが、校地が狭すぎる

ので、1926 年から校舎移転改築予算を台北州当局に提出しましたが毎年削除の憂目に遭いました。

折角改築するからには徹底的に改築し、できるだけの設備を整え、プールや同窓会館なども設置したい当事者及び保護者会の希望でした。1934 年 11 月 17 日の定例保護者会総会に於いて、新築移転について熱烈な動議が起こり、小野校長も保護者会や卒業生達と力を合わせて当局に陳情する傍ら保護者、卒業生、地元の人々の自発的な寄付金を集め、遂に上埤頭の土地を買い求めました。

1934 年 10 月の台湾時事新報が＜怨めしや州当局と保護者会騒ぐ、継子扱いの第三高女------＞と大見出しの記事にした程です。平井知事（1931 年 9 月～1932 年 3 月）時代からの陳情が野口知事（1933 年 8 月～1936 年 2 月）によって裁断されましたが関係者各位の努力と奮闘が大きな力量だったのです。

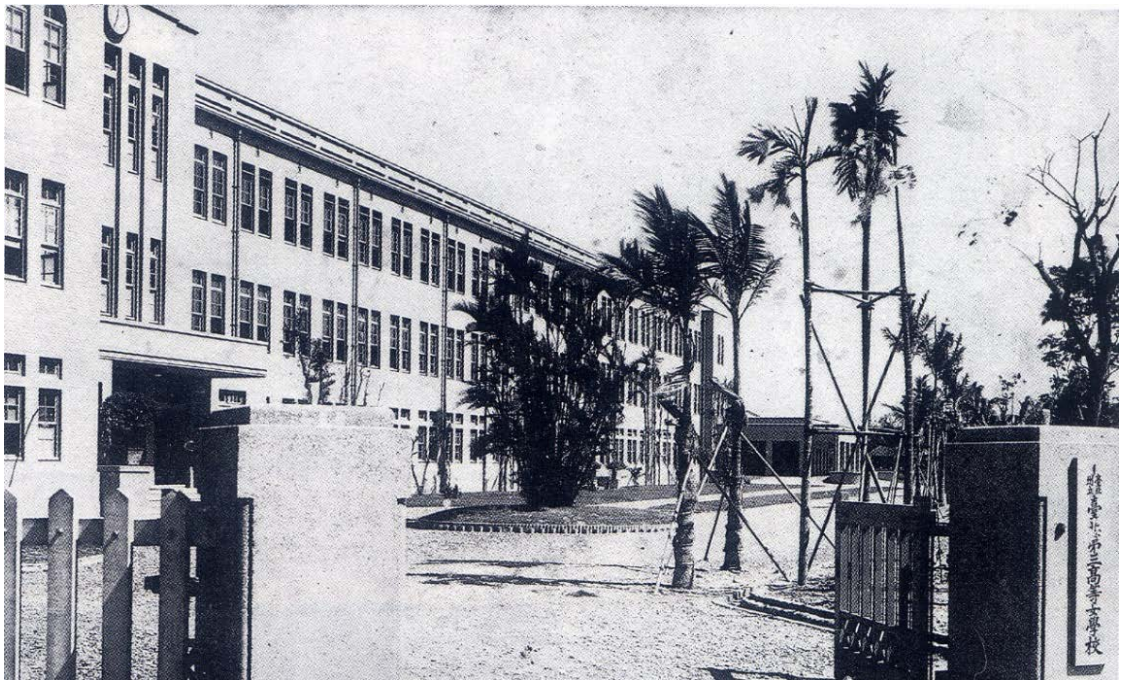
新校舎新築にあたり、小野校長は先ず内地の東京、大阪、京都その他の各県の学校を訪問され、何十枚も写真をとって新校舎にふさわしい設備、施設の設計の参考にしました。家庭科教育の裁縫、和裁、洋裁、台裁、刺繍各教科の教室、作法教室、割烹実習教室、雨天体操場、音楽教室等色々気を配りました。特記に値するのはオルガン教室に数十台のオルガンを備えて学生達がオルガンの練習が出来る様にも気を配りました。三高女卒業後公学校教師になるにはオルガンは必需の教科です。他日公学校教師は三高女卒業生が多かったのは、在学中に沢山の公学校教師に適切な教科を修習した賜物です。

2 新校舎へ移転

1936 年３月 31 日新築校舎建築工事が開始され 1937 年 6 月に落成しました。

1937 年 7 月 7 日西門町の木造建ての校舎から新築の校舎へ移転する時、大きな物品は車で運びましたが、経費不足なので、顕微鏡、フラスコ、模型、標本、その他、壊れやすい物や軽い物は全校の学生達が両手で持って、列をなして新校舎まで歩いて一時間ぐらい掛かる道を何往復もして持って行きました。新校舎の運動場も校庭も荒れたままです。入居後、師弟一緒に運動場の瓦や石ころ、雑物等を手分けして拾って捨てて、鎌で雑草を刈り取り、それから学生達は各自持参のスコップ、先生方もシャベルを持って土を掘り下げて、体育の先生の指導の基に運動場を作りました。荒れた校庭も整理して植物をうえました。今年（2022 年）99 歳の三高女後期聯誼会会長の施素筠様（17 期）もこの作業場の一員でした。スコップで土掘りして手には豆ができる、真夏の炎熱下で汗水たらして親身になって植えた校庭の一草一木が懐かしい昔を思わせると、施会長はよく話します（写真 3）

写真３.戦前の台北第三高女校舎（現在は指定古跡）



3 小野正雄校長先生による三高女の改革躍進

大正 13 年（1924 年）4 月に台湾総督府分教司視学官小野正雄先生が三高女校長先生に派遣されました。小野先生は学識経験豊富で迫力満点、台湾の民情もよく分かる方です。其頃全台湾で師範科を設置して公学校女性教師を育成する学校は三高女だけですから、重要な責任を担った小野校長は着任早々色々な改革を施しました。その概要は以下の如くです。

1）三高女は提灯学校

小野校長は内地から大学卒の成績優秀な若い先生を招聘して、教師陣容と教科、教学内容の改善を計らいました。成績展覧会、教学研修会、有名人の講演会、耐熱健康強行遠足、登山、新高山登山等の年行事事項をドンドン増やし心身共に健全な学生の養成に励みました。戦時中は勤労奉仕、雲母剥ぎ、田植え、芋植え、ヒマ植え等も有りました。

宮中との接触も頻繁になり、毎年の新年歌御会の御題を全校生に作らせて、その優秀作品を宮中歌御会に模して講堂で発表会を行いました。

又、国語、歴史、体育等の先生方が指導してその御題に関係した詩を作らせ、みんなで一緒に研究しながら御題の詩に振り付けをして舞踊を創作し、所謂勅題舞踊として発表させました。（作った詩を先生方や学生達が一緒に色々討論しながら振り付けを考案して創作した舞踊が即ち勅題舞踊です。）

多種多様の行事の準備や整理等で、職員達は残って遅くまで仕事をして、提灯を下げて帰宅するので、三高女は提灯学校と喚ばれました。

2）作法教学

作法教室は和式と洋式の二種類が有りました。和式作法教室は枝折戸をくぐって玄関に入り、８畳二間に縁側も付いています。和式作法教室で襖、障

子の開け方、閉め方、正坐の仕方、お辞儀の仕方、来客対応、お茶の出し方、飲み方、食事の仕方等色々な礼儀作法を教えます（筆者は南門小学校時代、修身の授業で習いました)。洋式食事作法は更に実習として、当時台北では最高級の鉄道ホテルのレストランで先生引率のもとで洋食のマナーを習いました。17 期生の後期聯誼会施会長もそこで豪華な洋食を食べた方です。値段は憶えていないが普通の人はとても行かれない豪華さだそうです。

3）勅題舞踊

当時皇居で御前舞の勅題舞踊が有りました。1931 年宮内省から台湾にも勅題舞踊出演の要望が有りました。台湾当局は一高女と二高女にだけ連絡しました。小野校長が何故三高女が除外されたかと、総督府に掛け合いました所、台湾人女性は日本舞踊ができないからと言う理由です。しかし小野校長は引き下がらず何度も何度も交渉して、十日後に許可が下りました。

他校より準備時間が少ないので、直ちに体育の先生が振り付け、小野校長が作詞、音楽の赤尾先生が作曲して、学寮生から出演者を選出し、寝る間も惜しんで猛訓練を始めました。その年台湾からの出演者は一高女、二高女と三高女の三校でした。その結果思い掛けなく三高女が一番上出来で、台湾人を見上げた観衆の満場一致の落雷如きの拍手喝采が続きました。この度の勅題舞踊～海辺の巌～の歌詞は以下のようです。

海辺の巌

春は初日の二見浦　眺めは四時に変われども
秋は時雨の松浦潟　長汀曲浦はてもなき
室戸の夏の浪しぶき　三国の岸を守る巌
占守の冬は雪の傘　久遠に変らぬ姿かな

勅題舞踊は 1941 年出演「漁村の曙」、その他にも「暁の鶏声」、「朝陽映島」等の写真がありますが詳情の資料が検索できませんでした。しかし戦争で取り止めになるまで、三高女では勅題舞踊は続けられていた事をお分かり頂けると思います。。

4）献詠

(1)明治神宮献詠会；明治天皇と昭憲皇太后の神霊を慰め奉るための献詠会

1933 年（昭和 8 年）11 月 2 日、明治神宮献詠会には数千百の献詠歌があり三高女からは 515 首の献詠歌が有りました。その中から、当時三高女二年生の陳氏美女作の〈秋の田＞が神前披講歌として予選の光栄に浴しました。11 月 3 日の午後献詠会から学校に電報が届いたとき職員生徒一同感激に溢れました。美女の明治神宮献詠歌会予選の歌は下記の様です。この歌で受領した賞品は二冊の明治天皇御製、昭憲皇太后御歌集です。

秋田

高砂の島にも秋はおとずれて
小田にこがねの波寄するかな

*昭和 7 年での「兵営の月」の題では全国より 7 千数百首中の十二人の一人に四年生の林氏珮貞が入選しました。

*昭和 10 年の「**読書**」の題では王櫻が入選しました。以下は入選した王桜の歌です。

読書
文読みて涙流しぬ文字知らぬ
母の淋しさ深く思いて

(2)靖国神社献詠祭

1937 年（昭和 12 年）度靖国神社献詠祭へは全国より約千首の献詠がありました。三高女からは職員生徒の 120 首が選ばれて奉納されました。題は「海上霞」でした。加藤茂雄先生と 13 期生から 17 期生の四名の歌が予選歌に入選して神前に奉納されました。

三高女の先輩達で文章よりも和歌を詠む事のほうが好きな方が少なくありません。聯誼会会誌に沢山の和歌を書かれています。以上の献詠の成果から三高女生が厳しい立派な、良き和歌教育を受けられた事が了解できます。1945 年 4 月入学の 26 期生が受けた日本教育は小学校だけで、和歌を詠む勉強は有りませんでした。その関係だと思いますが、聯誼会会誌には 26 期生の詠んだ和歌は一首もありません。

3）刺繍額献上。

献上する刺繍額仕事開始前日には必ず斎戒沐浴します。仕事をする教室にしめ縄を張り巡らせ、台湾神社の神主さんが、小野校長始め図案設計の先生と刺繍指導の先生及び刺繍をする学生のお祓いをしてから仕事を始めます。仕事に入る前には手を洗い、口を漱いでマスクをつけてから刺繍を始めます。完成した刺繍を額に入れて、小野校長が事務官を伴って宮中大宮御所に赴き食堂に奉納します。次の年に又新しい作品ができると、先年のものは御下賜になり学校の光栄記念館に保管されます。以下は現在中山女高の校史室に収められている御下賜刺繍です。

*鳳凰木と蓬莱鶯

1935 年郷原古統先生図案設計、楊先生指導，黄錦花，黄鶯両学生製作。

*月下美人

1939 年丸山福太郎先生図面設計、楊先生指導、沈麗恵，顔玉両学生製作

*竹筏

1940 年丸山福太郎先生図面設計、楊先生指導、（学生姓名不明。）

*観音山と帆船

1941 年丸山福太郎先生図面設計、楊先生指導、李阿燕，呉麗雀両学生製作。

4）光栄記念館（写真 4）

写真４.

先般のような御下賜刺繍や、宮殿下行啓の写真や、学校の記念行事の記念写真等を陳列されている記念館で、記念館前庭のガジュマルは宮殿下御手植樹です。成久王殿下、房子内親王、邦彦王殿下、各宮殿下御手植樹が今でも残っています。

宮殿下が台湾行啓の折に台湾女子教育状態御覧に三高女は欠かせない学校でした。前後五回御覧の誇りがあります。御覧の折にはある一クラスの授業を御覧なされ、その後、そのクラスで指名された 5 人の学生と話し合います。

『L 女が昭和 16 年３月、閑院宮様が新婚旅行で台湾へいらっしゃった時、三高女にお見えなされました。その時校長先生の指名で L 女が呼ばれ朗読をお聞かせした時、アクセントがいいので宮様が校長先生にこの子は台湾人か日本人かとお聞きになられました。台湾人学生が綺麗な標準語を使うので、校長先生が褒められ鼻高高….』と述べていますが、事実ではありません。

当時皇族が台湾訪問の折、台湾女子教育状態視察には必ず三高女を訪問なされます。その時にはあるクラスを御覧クラスに指定し、そのクラスで指名された 5 名の学生が皇族の問いに答えるしきたりでした。

L 女と同クラスで又クラス代表でもある A 子さんに伺った所『閑院宮様おなりの時、A 子さんのクラスが御覧クラスに指定され、A 子さんは指名 5 人の一人だったから良く憶えている』とのことです。A 子さんの話は道理にあっています。L 女の話とは全然同じく有りません。読者の皆様もただ一人の学生の朗読だけでその学校の教育状態の良し悪しを決められることはできないと思われることと思います。

5）耐熱強行遠足

体力トレーニングの目的で毎年 5 月に挙行される、全校の職員生徒が参加

する年中行事の一項目です。

学生は校医の身体検査によって第一分隊と第二分隊に分けられます。第一分隊は体力優良組で定められた距離を往復します。第二分隊は体力普通組で片道だけ歩きます。歩く道は台北―基隆（片道約 30km），台北―淡水（片道約 28km），台北―桃園は約 50km あります。

実施前に小野校長と体育の先生が、地形、交通、休息所等の実地検討をして休息所の地点を決めます。休息は長休息と短休息があり、休息所では女性教師が地元の父兄や卒業生達と一緒に世話役として茶水を用意して学生達を労います。

若い男性教師が第一分隊を引率、比較的年長の男性教師と女性教師が第二分隊引率、学生は縦隊で列をなして歌を歌いながら気楽な気分で自分の体力に合わせて記録を創る様に努力して歩きます。引率の教師は速度を時間表に合うように検討しながら学生と一緒に歩きます。行進中は飲食禁止で、休息所に辿り着いてから始めて水が飲めます。歩き終えた距離と時間は体力テストとして成績表に登録されます。

小野校長は校医や看護師らと車に乗って、中途落伍した学生を車で休息所まで連れていきます。小野校長は時々下車して学生達と一緒に歌を歌ったりお喋りをしたりして自分も体力トレーニングをします。炎熱にめげず、気張って歩く斯様な長距離遠足によって、学生の体力トレーニングの傍ら精神的忍耐力と奮励努力、克苦耐労の精神を養成したのです。

強行遠足についてのＳ教授とＬ女の会話で以下の様に述べています。

Ｓ教授；強行遠足は何月にやるんですか

Ｌ女；夏です。夏休みの暑いさなかによ

筆者が参考史料として読んだ書籍では全部５月と書かれていますから、夏休みの暑いさなかに強行遠足実施ではありません。Ｌ女の記憶錯覚だと思います

6）新高山登山

三高女の体力トレーニングには登山もよく使われました。台北市近郊の大屯山、七星山、角板山などは度々登る山です。本稿では新高山登山記述だけいたします。新高山登山計画挙行前に小野校長は数人の友人と登ったことがあります。多分先に道路事情の検索に行かれたのでしょう。現在は玉山と称し登山許可が必要です。筆者は登山口まで行きましたが登ったことはありません。今は道も良くなり登り易くなったと聞いていますが相当の体力なくては登れません。新高山登山も年中行事の一つです。新高山登山は希望者自由参加ですが、成績優良且つ品行方正、加えて耐熱強行遠足体力検定合格者に限ります。

合格者は登山一ヶ月前から準備運動として一回り 4km ある三線道路を毎日放課後に歩きます。出発に当たり先ず平穏無事の祈祷に台湾神社へ参詣しま

す。

第一回の新高山登山は 1927 年 7 月 7 日です。参加者は小野校長を団長として、梅谷、武田、大橋、小谷野 4 名の先生と 14 名の学生でした。

出発当日は同行二人と書いた菅笠と金剛杖、脚絆を巻き、足袋を穿いた勇ましい姿で、背中に日用品、常備薬、防寒衣類、食料等を入れたリュックサックを背負った大武装でいきます。登山口からは地元駐在の警察官に頂上まで案

案内されて頂上まで登りついたら眼下に見える日の出に向かって万歳三唱を唱えます。出発から台北へ帰り着いて台北駅で盛大な歓迎を受けて帰宅まで前後一週間かかります。帰校後全校の学生に経験談を話し、以後の希望者の参考にさせます。

女学生の新高山登山は三高女が初めてです。慎重のため台湾総督府学務部からも数人同行されました。映画にも撮られて大評判でした。その映画が祖師廟の広場で公演された折、加藤茂雄先生が内容の説明をされました。

第一回の新高山登山の学生は皆耐熱強行遠足で 50km 以上歩いた人です。

7）三高女卒業生名簿制作

終戦で引き揚げる時、小野校長は三高女に関する資料を大事に日本へ持ち帰り、扶桑会の名で三高女同窓会を作りました。扶桑会大会には毎回台湾からも 100 数十名の参加者があります。一方 1957 年 11 月 10 日台湾で成立した三高女校友聯誼会会員大会には日本から来られた卒業生や恩師、家族を含めて 1600 名の盛会で、撮った写真の長さは 5m もあります。（写真 5）

写真５（左から；羅丁妹副会長、黄郁宜校長、筆者）

1957 年 12 月 8 日は北二女 12 週年校慶日で、旧三高女創立 60 週年にもあたります。旧三高女卒業生達が万難を排して、小野校長を台湾に招待しました。沢山の貴婦人が前触れ無く日本人を連れて現れ、校慶式典に参加したいとの要望を門番さんが聞き入れません。校門の外で暫く待たせられました

が、式典終了後事情聴取して納得した石校長先生が御自分で校内参観案内されました。小野校長が門前払いされたと言われていますが、事前の連絡不行き届きから起こった誤解です。この事についてＬ女の話は以下のようですが語弊です。

Ｌ女；学校が小野校長を追っ払った。それで卒業生達が校長が外省人だから今後母校に行くまいと、行きませんでした。

事実は三高女校友聯誼会と母校の連絡は頻繁です。100 週年には 100 万元寄付、特に 110 週年には率先 110 万元寄付したので、時の黄郁宜校長先生が初めて作った校史室に大きな三高女室を設けてくれました。三高女校友聯誼会は 60 週年(2017 年)で有終の美を告げましたが、聯誼会と母校の交流は現在に至るまで途絶えていません。

1957 年 12 月 8 日、母校の門前で待たされた小野校長は当日昼食の歓迎会で、三高女卒業生名簿を製作して三高女校友聯誼会組織を強化して積極的に母校

と連絡すべきと、諭しました。

その後小野校長は再来台して半年台湾に逗留して三高女卒業生名簿製作の協力をなさいました。4 年の時間をかけて創立当初の手芸科第一回から始めて、日本人同窓生、恩師全員含めての詳細な名簿です。

8）学寮生

三高女には 260 人ぐらいの学寮生がいました。一部屋 10 人で最高級の四年生が室長で、学寮は厳しい管理規則があります。3 度の食事は学寮提供以外の私物は厳禁です。以下のＬ女の話は語弊です。

Ｌ女；合格した途端に学寮に入れられました。入った途端に室長でした。合格はしても入学手続きをまだしていない人を学寮が入れることはありません。況してや何も分からない一年坊主を室長にすることは絶対にありません。大げさな作り話としか思えません。四年生の時に室長になったのかも。厳禁の食物を送ったら没収ばかりでなく、罰則規定もあります。『あんなまずい食事でどうやって生きていくの』と心配した母が、いつも買って送ってくるんですよ。

9）唯一の原住民学生

三高女唯一の原住民学生ヤジュツ・ベリヤは 1915 年技芸科第九回卒業生で、タイヤル族頭目の娘です。卒業後総督府招聘により 15 年間総督府でタイヤル語を教えました。したがって、以下の口述は間違いです。

Ｓ教授；三高女に高砂族の学生はいたんでしょうか。

Ｌ女；私の知っている限りではなかったようです。

10）食前の反省、三高女報国田圃

毎食食前には米を作るお百姓さんのご苦労感謝の気持ちで必ず合掌して**食前の反省の**歌を朗読します。

粒々辛苦のこの御飯　無事に頂く有り難さ
年の程々わきまえて　努めましょう世のために

食事では食べ残しは勿論、一粒の御飯を残す事も許されません。好き嫌いなく何でも食べて、お百姓さんに感謝すると共に倹約、節約、無浪費の心掛けを養成しました。

新校舎入居の頃校舎の前方にはまだ田圃が有りました。米を作るお百姓さんの苦労を体験させるため、勤労奉仕として学生達に田植え、除草、肥やし、稲刈りをさせました。炎熱下でブルーマー姿で泥沼の中を這い回って汗水たらして作業する学生達を、畦道に立って汗をかきながら小野校長が御自分で監督なさるので学生達も真面目にやります。将来主婦としても、公学校教師としても、物を大事に大切に使う、節約、倹約の習慣と、思いやりのある子供を養育するための教育の一環です。三高女報国田圃と名付けられた田圃です（写真６）

写真６

11）一人の受験生に試験官派遣

1906 年台北から二泊 3 日かかる羅東に生まれた林静は 3 歳に母を亡くし、5 歳の時父も亡くなられました。祖母に育てられた林静は 1918 年優秀な成績で公学校を卒業しました。校長先生が三高女進学を勧めましたが、手放すのが惜しくて祖母は承諾しません。諦めない校長先生が 3 年かかって、やっと説き伏せました。しかし台北まで行って受験するのは困難重々なので、小野校長が郷原古統先生を羅東に派遣して受験させました。一人でも余計に台湾人に良い教育を与えたい小野校長の思いやり深い処置です。三高女卒業後、林静は日本東京女子大学へ留学して芸術を学びました。

Ⅴ 追補：奇跡の長寿、藤谷芳太郎校長先生

1941 年 8 月、台北第二師範学校校長の藤谷芳太郎先生が校長として台北第三高女へ転任なされました。台北第二師範学校も台湾人就学の学校です。藤

谷芳太郎先生は公学校教師育成にとって大事な男女二校の教育に従事された訳です。小野校長の後継ぎですから三高女は一応軌道に乗っていましたが、校舎は軍に徴用される、二高女の校舎使用、疎開、若い先生は徴集されるなどの戦時態勢で、正常な学校教育はできず、戦時中の特殊な教育の大任で色々な心労がありました。。九死一生の憂き目が何度も有りましたが、106 歳までご健在でした（享年は定かではありません)。エピソードは以下のようです。

1　宿直夜の命拾い

1945 年 3 月 17 日夜、藤谷校長先生は三高女の宿直係を御自分が引き受け、二高女の石田泉先生と一緒に宿直をしました。3 月 17 日の夜は大空襲があり、空襲警報が 4 度も発令されました。第 4 回の空襲警報発令の時、虫の知らせか、藤谷校長が『危ない！出ましょう』と飛び出た途端に全館火の海です。宿直室の両側に大きなドラム缶が落ちたのです。少しでも飛び出すのが遅かったら、丸焼きになっていたことでしょう。

2　官舎入居しなかったお陰で命拾い

前任の小野校長が官舎に住まず自宅に住んでいたので、、藤谷校長も新築木造建ての家を買って住みました。戦争になり、軍の疎開命令で、人夫を雇って新築 3 年の自宅を取り壊すことで、5 月 31 日日頃より遅れて昼頃に出勤しました。5 月 31 日は昼間から大空襲です。藤谷校長が着いた時には、いつも決まってる藤谷校長の防空壕に入れなく、致し方なくその防空壕の入口に屈みました。至近弾で防空壕の掩蓋が崩れ壕内に退避した人達は全部即死です。藤谷校長は入口にいて掩蓋がなかったので九死に一生を得たのです。もし官舎に住んでいたら、遅刻することもなく、壕内で即死していたことでしょう。

3　終戦後、三高女の学生に助けられた話

1）暴漢侵入事件

終戦後のある日、職員会議を開いているとき、数名の鉄棒を持った青年達が闖入して、『3 年前にバスのなかで台湾語を使っている学生を咎めた教師がいる。それを出せ』と藤谷校長の背を突きました。廊下で眺めていた数名の三高女の学生が入ってきて、『此処においでの先生方は私達の恩師です。指一本でも触れたら承知しませんよ』と言いました。青年達はすごすごと出て行き藤谷校長は又一難を免れました。

2）危機一髪　警備総部逮捕

終戦後、中国の陸軍中佐で、三高女の教頭になる人が接収官として学校を接収にきました。備品等一切一つ一つ帳簿によって引き渡しました。

その何日か後に奈良高師出身の鄭英励校長が就任しました。藤谷校長先生が鄭英励校長に挨拶後、鄭英励校長に留用解任をお願いしたところ、鄭校長が学生が藤谷校長先生を慕っているから、そのまま留まってくれと。それな

ら尚更速く解任をして頂きたいと藤谷校長先生はお願いしました。

注：留用されたら帰国できません。それで、大陸から外省人の先生が就任するまで、日本人先生が暫く授業に出られたのは留用と言う理由で帰国を待たされていたのです。鄭校長が留用解任しなければ、帰国証明書が取れません。それで藤谷校長先生が鄭校長に挨拶に行った時に藤谷校長先生が留用の解任をして頂きたいと鄭校長にお願いしたのです。

数日後鄭英励校長から呼び出しがあって、中国軍の軍楽隊が持ち去った大きいピアノを取り戻せと言いました。それを取り戻さなければ留用は解かぬとの無理難題です。正式の接収手続きを経て、接収官に完全に引き渡した学校の品物が紛失したのは藤谷校長の責任だと言わんばかりです。藤谷校長は『戦争には負けたが道理には負けぬ、接収後の管理は、鄭校長の責任だ』とやり返しました。藤谷校長一家は 1946 年 3 月 5 日の船で引き揚げることになっていたのですが、ピアノのことで、藤谷校長一人だけ帰れません。

3 月 15 日は卒業式です。学生が卒業証書に藤谷校長の名前を入れて欲しいと鄭英励校長に陳情しました。それを藤谷校長が唆したと鄭英励校長が警備総部に訴えました。警備総部が藤谷校長を逮捕するとの消息は三高女卒業生達の耳にも入り、ある卒業生の夫が台北第二師範学校卒業生で、たまたま日僑回国関係の事務に携わっている人で『速やかに帰国なさるのが安全』と、密かに単独回国証明書を作って上げました。日本人帰国は地域ごとの集団帰国ですが、この単独回国証明書があれば単独で帰国できるのです。警備総司令部に逮捕されたら、それこそ一大事でした。

3 月 25 日の船で無事に帰国した藤谷校長は幸運に恵まれ、名大の医学部厚生女学部の講師、名古屋学院教諭等の職につき、一宮女子短大では教授、教務部長として 78 歳で退任、名誉教授になられました

4 三高女同窓会参加

1）平成元年 10 月 5 日.6 日第 11 回扶桑会全国大会参加

98 歳の時、ぶどうの芽を取ろうとした藤谷校長はひっくり返って右手首が折れましたが、折れた手を肩から吊って平成元年 10 月 5 日、6 日京都での扶桑会に参加しました。この会には台湾からも 120 名参加しました。教え子達に会えた嬉しさの歌です。

台湾の二十四年に悔いはなし、われ、彼の国に教師たりこと

注記:藤谷校長先生著：老いのくりごと（摘録)。台北第三高女校友聯誼会六十週年特刊 P28 より。

2）1984 年 8 月 4 日 21 期生の歓迎会

台北第二師範学校卒業生の招待で来台された折に、時間を割いて頂いて三高女 21 期生が歓迎会を催しました。中期聯誼会会長鄭玉麗も参加されました。100 人の予定だったのが 220 人にもなって、ぎゅうぎゅう詰めでしたが心温まる歓迎会でした。御年 93 歳でしたが 20 歳は若く見える藤谷校長は宏

亮な声で挨拶の言葉を述べられました。1988 年の 90 週年記念日の案内状に対してご自分直筆サイン入りの返事を書かれています。

この歓迎会でも皆が「藤谷校長先生をお迎えして」の題で以下の短歌朗詠をしました。

師の君を迎ふる良き日ぞ蓬莱の教え子集ふ慕情あふるる

師の君に健やかあれとことほぎてうたふわれらは声を限りに

台湾人はよく〈行善有福報〉と言います。何度も命拾いしたにも拘らず健やかに天寿を全うなされた藤谷校長には天が＜福報〉を与えたのかも知れません。

第一部終わりに当たって：黄彬彬

小野校長が愛弟子達の幸せを祈念して回顧九十年に寄せられた和歌です。

地位名誉黄金も玉もなにせんや

健康にまさる幸福はなし

教え子たちにとって、身に染みる教訓の名言です。誉れ高き台北第三高女の流れは台北市中山女子高校によって永久に引き継がれて行くことでしょう。

最後に 22 期生の級長で又 22 期学年代表でもある曹淑珍さんの思い出の言葉〈三高女聯誼会会誌 60 週年特刊 P169：学生時代の思い出〉及び、日本人の先生方が三高女のピカ 1 と謳われた 9 期生陳宝玉さん(中期聯誼会副会長兼総幹事)の和歌――美しき校風――〈三高女聯誼会会誌回顧九十年 P45〉を以て三高女の全貌を了解して頂きたいと思います。

*学生時代の思い出：22 期学年代表　曹淑珍

想うに今の若者に比して至極地味な苦しいつらい事にもたくさん逢いましたがあれだったからこそ私達の健全な体と思想が培かわれ 90 歳という自分さえ納得できない様な年に何とか楽しく生かされています。

我々の誇りある三高女よ！今でも合格した当時の胸のとどろき、四年間通じての厳しい立派な先生方の御教、友情溢るる素敵なお友達との絆、このいとしい大事な思い出を大事に一生胸に秘める事でしょう。

*美しき校風：1988 年 11 月九期生 陳宝玉

誉ある母校創立九十週年各地の同窓祝ひに集う

＜親とあがめ子と愛しむ＞の師弟愛絆はかたく永久に続きて

そのかみの教え子を守りて　先後輩姉妹が如くいたはりしたふ

全島の狭き門くぐりて　乙女らは規、正、礼、勤をば誓ひたり

女子が新高頂上旗たてしパイオニアたりしは北三高女生

炎天下四十粁越す遠足にしかと鍛えり忍耐力を

勅題歌、勅題舞踊と他校になき情操教育重んぜられて

裁縫に刺繍、割烹、楽器まで女子たる技の日々磨かれ

孔孟の教え伝ふる同窓の桃李天下に満ちて名高き

有為転変の世なれど四代同窓の縁の深き家庭床しく
団結とふ＜三高女精神＞モットーにスクラムを組む夕映えの中
総統夫人を上に幾多の良妻賢母誉れの高き校風美しき